

イエスのことば 第 60 回

しかし、神は彼に言われた。『愚か者、おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』

自分のために蓄えても、神に対して富まない者はこのとおりです。(ルカ 12 : 20~21)

□文脈の確認

1. イエスの公生涯を起承転結の四部構成に分け、背景を理解しながら、イエスのことばを一つひとつ学んでいる。
2. 転の部、弟子訓練。十字架まで、1 年余。その前半の約 6 か月間において、イエスは、異邦人の地域へ 4 回、旅行した。その旅行から帰ってきた後の約 3 か月の間、紀元 29 年秋 10 月から冬 12 月のまで、約 3 か月の間に起きた出来事(十字架刑は、紀元 30 年の春 4 月)。10 月には仮庵の祭り、12 月には宮清めの祭りがある。
3. 仮庵の祭りの後 (ルカ 10 : 1~13 : 21)
 - ① 七十人の派遣 (10 : 1~24)
 - ② ある律法学者との問答「永遠のいのちを得るためには」(10 : 25~37)
 - ③ マルタとマリアという姉妹の家にて (10 : 38~42)
 - ④ 祈りについての教え (11 : 1~13)
 - ⑤ メシア的奇跡：口をきけなくする悪霊の追い出し (11 : 14~36)
 - ⑥ あるパリサイ人の家にて：手を洗う儀式について (11 : 37~54)
 - ⑦ 弟子たちへの 9 つの教え (12 : 1~13 : 21) 弟子たち：特に、使徒たち
4. 弟子たちへの 9 つの教え (後半 4 つは群衆にも、あるいは群衆に語られる)
 - A) パリサイ人の家を出てきてから、弟子たちに。偽善に気をつけよ (ルカ 12 : 1~12)
 - B) 群衆の中からイエスへの要望をきっかけに。貪欲に注意せよ (ルカ 12 : 13~34)
 - C) 主の再臨に備えて、目を覚ましていなさい (ルカ 12 : 35~40)
 - D) 忠実なしもべでいなさい (ルカ 12 : 41~48)
 - E) メシアの初臨がイスラエルにもたらす結果 (ルカ 12 : 49~53)
 - F) 群衆にも。旧約聖書の預言により時のしるしを見るなら、イエスがメシアであると分かる (ルカ 12 : 54~59)
 - G) 群衆に。イエスについての考えを変えないなら、災難に遭う = 紀元 70 年のエルサレム陥落に巻き込まれて死ぬ (ルカ 13 : 1~9)
 - H) 会堂で (群衆に)。18 年間腰が曲がって全く伸ばすことができない女の人を安息日に治したことを通して、イスラエルが口伝律法とサタンによる束縛から解放される必要について (ルカ 13 : 10~17)
 - I) 奥義としての神の国の特徴。外面的には大きく成長して繁栄するかのように見える。しかし、そこには鳥が巣を作り、内面的にはパン種を含む (ルカ 13 : 18~21)

B) 群衆の中からイエスへの要望をきっかけに。食欲に注意せよ (ルカ 12 : 13~34)

1. 群衆の中からある人がイエスに要望 (ルカ 12 : 13~15)

13~14 節 群衆の中の一人がイエスに言った。「先生。遺産を私と分けるように、私の兄弟に言ってください。」すると、イエスは彼に言われた。「いったいだれが、わたしをあなたがたの裁判官や調停人に任命したのですか。」

- メシアの王国では、王なるメシアが公正なさばきを行うと預言されている (イザヤ 2 : 4、9 : 7、11 : 4)。群衆の中のある人はイエスに、あなたがメシアなら自分の遺産問題を調停してほしい、と要望した。
- イエスの答えは、紀元前 1500 年頃にイスラエルの民がモーセを拒否した時のことばを引用している。「だれがおまえを、指導者やさばき人として私たちの上に任命したのか」(出 2 : 14)。イエスがこのことばを引用したのは、モーセが拒否されたように、自分もイスラエルの人々から拒否されたからである。メシアの王国は今の世代からは取り去られ、将来の世代に先延ばしとなった。イエスは、もはや公に自分をメシアとして現わすことをしない。

群衆に言われた。「食欲に気をつけなさい」

15 節 そして人々に言われた。「**どんな食欲にも気をつけ、警戒しなさい。人があ**
り余るほど持っても、その人のいのちは財産にあるのではないからです。」

2. 群衆に、ある金持ちのたとえ話 (ルカ 12 : 16~21)

16~21 節 それからイエスは人々にたとえを話された。

「ある金持ちの畑が豊作であった。彼は心の中で考えた。『どうしよう。私の作物をしまっておく場所がない。』そして言った。『こうしよう。私の倉を壊して、もっと大きいのを建て、私の穀物や財産はすべてそこにしまっておこう。そして、自分のたましいにこう言おう。「わがたましいよ、これから先何年分もいっぱい物がためられた。**さあ休め。食べて、飲んで、楽しめ。**』」

しかし、神は彼に言われた。『愚か者、おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』

自分のために蓄えても、神に対して富まない者はこのとおりです。」

- ある金持ちの畑が豊作であった。彼はすでに自分の倉庫を持っていたが、それに入りきれないほどの豊作であった。自分と家族、使用人たちを養う

平静であれ (心配するな)
(それまで、心配していた)

ためには今の倉庫で十分だった。

- ここで彼はまわりに目を向け、余剰となる産物を貧しい人たちに分け与えるべきであった。しかし、彼はそうしなかった。まわりには目もくれず、倉庫を建て替え、もっと大きい倉庫にして、そこにすべてを蓄えた。
- これが、食欲である。自分にはあり余るほどの物があっても、それをためこむ。決して、他人と分け合おうとしない。このような食欲の根底にあるのは、将来に対する心配である。今年は豊作だった、しかし来年はどうなるか、心配で心が休まることがない。
- しかしどんなに食欲に財産を蓄えても、その人のいのちは財産にはない。神は食欲な人を、「愚か者」と呼ぶ。
- 「神に対して富む」とは、どういうことか？ 解説に進む。

3. 弟子たちに、たとえ話の解説 (ルカ 12 : 22~34)

たとえ話に込められた原則 心配はやめなさい

22~23 節 それからイエスは弟子たちに言われた。「ですから、わたしはあなたがたに言います。何を食べようかと、いのちのことで心配したり、何を着ようかと、からだのことで心配したりするのはやめなさい。いのちは食べ物以上のもの、からだは着る物以上のものだからです。

- 天の父はあなたがたのいのちを養い、からだを守ってくださっている。だから、何を食べようかと、何を着ようかと **心配するのは、やめなさい。**

原則の説明① からすとの比較

24~26 節 からすのことをよく考えなさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、納屋も倉もありません。それでも、神は養ってくださいます。あなたがたは、その鳥よりも、どんなに大きな価値があることでしょうか。あなたがたのうちだれが、心配したからといって、少しでも自分のいのちを延ばすことができるのでしょうか。こんな小さなことさえできないのなら、なぜほかのことまで心配するのですか。

- からすは労働もせず、倉なども持っていない。それでも神は養ってくださる。あなたがたは鳥よりも価値がある者たちだ。だから神が養ってくださるのは、当然である。
- 心配したからといって、少しでも自分のいのちを延ばすことができる人はいない。そんな小さなことさえできないのだから、ほかのことまで心配するな。

原則の説明② 草花との比較

27~28 節 草花がどのようにして育つのか、よく考えなさい。働きもせず、紡ぎもしません。しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を極めたソロモンで

さえ、この花の一つほどにも装ってはいませんでした。今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草さえ、神はこのように装ってくださるのなら、あなたがたには、どんなに良くしてくださることでしょう。信仰の薄い人たちよ。

- 働きもせず紡ぎもしない野の花ですら、こんなに美しい。今日は野にあって花を咲かせ、明日は枯草になって炉に投げ込まれる草さえ、神はこれほどに装ってくださっている。まして、あなたがたのからだを、神は守り、良くしてくださる。

原則に従う信者に対する神の約束

29～31 節 何を食べたらよいか、何を飲んだらよいかと、心配することをやめ、気をもむのをやめなさい。これらのものはすべて、この世の異邦人が切に求めているものです。これらのものがあなたがたに必要であることは、あなたがたの父が知っておられます。むしろ、**あなたがたは御国を求めなさい。そうすれば、これらのものはそれに加えて与えられます。**

- 何を食べようか、何を飲もうかと、心配することはやめなさい。これらのものがあなたがたに必要であることは、天の父が知っておられる。
- むしろ、あなたがたは、神の国を求めよ。神の国のプログラムが進展するように願い行動するならば、衣食住はそれに加えて与えられるという神の約束。

神に対して富むとは・・・心配せずに、地上では宝を分け合う

32～33 節 小さな群れよ、恐れることはありません。あなたがたの父は、喜んであなたがたに御国を与えてくださるのです。自分の財産を売って施しをきなさい。自分のために、**天に**、すり切れぬ財布を作り、尽きることのない**宝を積みなさい**。天では盗人が近寄ることも、虫が食い荒らすこともありません。

- あなたがたは、将来、神の国を相続する。だから、今は、自分の財産を売って施しをきなさい。それが天に宝を積むことになる。
- 天に宝を積むとは、地上で宝を分け合うことであり、天に宝を積むことが、たとえ話の結論「神に対して富む」ことである。

結語 どこに宝を積むかで、あなたがたの心がどこに向いているか、わかる

34 節 あなたがたの宝のあるところ、そこにあなたがたの心もあるのです。

- 地上の宝を自分のために地上に蓄える人の心は地上に向いている。どんなに地上に向いていても、死んだら地上の宝とは何の関係もなくなるのだが。
- 地上の宝を自分のためにため込むことはせず、必要をかかえる隣人と分かち合うことで、天に宝を積もうとする人の心は、天に属する事柄に向き、天の父を愛することを人生の中心におく。